

ハワイにおける沖縄芸能史の基礎的研究 —新聞史料にみるコンフリクト

栗山新也（文学研究科 日本学）

1. 調査の目的

世界的規模での糖業の再編に伴って県外への人口移動が生じる一九二〇年代以降の沖縄近代史を流亡した人々の伝統芸能から描き直す。

2. 主たる着眼点

①沖縄移民の歌や踊りから沖縄文化の変容を議論するのではなく、なぜ沖縄移民が異なる環境の中で沖縄と同質の歌や踊りを伝承しようとするのか（あるいはなぜ同じであることを主張するのか）という点に着目し、とりわけ古典音楽、古典舞踊、組踊りなど琉球王府下で育まれてきた伝統的な芸能ジャンルを積極的にとりあげる。

②内側（沖縄系人社会）で共有された芸能と、外側（戦前はおもに日系人社会）へ提示された芸能の質的な差異を観察する。

3. 調査概要

期間：二〇一〇年二月三日～二十四日

調査地：ハワイ大学マノア校・ハミルトン図書館

調査内容：新聞史料の収集（一九〇〇年から一九四〇年ごろまでを対象とした）

『新聞にみるハワイの沖縄人 90 年—戦前編—』（比嘉武信編著、一九九〇年）、『ハワイ琉球芸能誌』（比嘉武信編著、一九七八年）から、沖縄移民の文化活動が行われた日程をあらかじめ確認しておき、それをもとに日系人向けに発行された新聞史料『布哇報知』『日布時事』より関連記事の収集作業を行った。あわせて日本では閲覧不可能なハワイ日系移民関係の人名録、統計書、文学作品、回想録等も複写の対象とした。

4. 調査成果

I)地元の芸能グループによる古典音楽、古典舞踊、組踊りなどの公演、II)長期的な演奏家の招聘、沖縄芝居一座の興行、III)村人会の新年会や青年会の盆踊り、IV)レコードや楽譜の広告、V)ラジオでの沖縄音楽の放送、VI)沖縄相撲の大会、VII)日系人社会の催しへの参加などがおもにみられた。この発表では本調査から得られた知見の一部、とりわけ二次資料からは窺い知ることができなかった実態を、一九三〇年代の芸能活動に絞って述べる。

i)帰郷する

一時的に帰郷して沖縄の師匠のもとで稽古をつむことでハワイの沖縄芸能界に貢献するというありかたが、古典音楽や盆踊りにおいてみられた。さらにこうした過程のなかで最新の楽譜をハワイに持ち帰るといった事例が確認された。

ii)開鐘（けいじょう）※を弾く

野村流音楽会布哇支部主催の「琉球音楽と演劇の夕」（一九三五年十二月十八、十九日）で屋良部崎開鐘（やらぶざきけいじょう）が奏された事例。一九三〇年代以降、首里の旧家などにあつた数々の名器が米布に渡つたとされる。

※国宝級の三線のこと。

iii)競う

「琉球芸術競演大会」（一九四〇年八月九日から十五日）の事例。古典芸能の技量を採点し、競わせることで芸の向上を図つた。なお出身地ごとのグループで競うといった発想は沖縄相撲においてみられた。

iv)外へ提示する

新潟踊り、岩国踊り、琉球踊りが出場した「盆踊り競演大会」（一九三三年七月二十二、二十三日）での琉球踊りの事例。i) ii) iii)にみられたような本場志向に対し、きわめて創作性の高い盆踊りを上演していることが明らかになった。

5. 今後の課題

日本・沖縄移民の 1)地理的分布、階層、職業、出身地、ジェンダー構成、2)社会運動や村人会・県人会の活動、3)沖縄芝居の興行主や芸能公演への経済的支援者、4)芸能活動の時代的変遷、5)同時代の沖縄芸能界の状況、6)移民がのこした詩、琉歌、文学、7)スポーツや年中行事などを視野に入れた検討を当面の課題とする。